

交流集会 2

「対応困難事例の看護を考える」を企画・担当して

コーディネーター 川島 和代、天津 栄子、中田 弘子（石川県立看護大学）
赤川 晴美、高原 美樹子（福井県立大学看護福祉学部）
諸江 由紀子（金沢社会保険病院）

第2回学術集会の交流集会の企画として、西村学術集会長から研究成果の還元や新たな研究方法の広がりのため、本学の地域ケア総合センターにおける実施事業の中から企画してはどうかとの提案があった。そこで、看護職者と大学のコラボレーション事業である「対応困難事例の看護を考える」を交流集会企画の一つに取り上げることとなった。

改めて、看護者が取り上げる対応困難な事例とは“食事制限などの必要性はわかりながらも、一人暮らしで管理が困難”“退院を勧められているが受け入れ先がなく、家族の協力も得られない”“多様な要求のある患者の暴言や怒りに触れてかわかることに躊躇する”など、どのように援助すれば良いのか分からず困ってはいるが、対象のことが気になり、放っておけないと感じる現象である。先に述べた具体的な現象の特徴は、今日の医療現場を取り巻く社会情勢を反映したものとも言えるが、患者・看護者の関係に生じている問題の本質はいつの時代も変わらないことに気がつく。

コーディネーター役となった企画者らは、長年看護実践現場における事例検討会を通して、看護者が対応に困っている実践事例をふり返り、分析する中で、共通の構造が有ることを学んだ。もし、事例の構造を明確にすることができれば、納得した看護ができるのではないかと考えるようになった。現在は、実践事例の構造を視覚化するモデルの開発と検証をすすめている段階である。今回の交流集会では、臨床から提出された事例を検討し、対応困難事例の構造を明確化、より良い実践への手がかりを得る機会になればと考えた。

交流集会で紹介した事例は、60歳代の男性、糖尿病、関節部に感染症を併発、悪化した患者であった。元管理職で単身赴任の生活が長い方である。感染症の回復の遅延がみられるこの患者が病棟の

看護に怒りを表出され、看護者が『関わりたくない』と思い、悩んだ事例である。グループワークを始めた途端、経験豊かな看護実践学会の参加者は、様々な角度から事例の事実を確認し、意見を述べられた。参加者の表情が生き生きしている。頭脳がフル回転していることが見て取れた。【60歳代の男性とは】、【糖尿病とは】【感染症とは】、【怒りとは】……ワークで出た意見を発表しているとあつという間に時間が過ぎていく。キーワードを丁寧にモデル図に示した。関わる鍵は『先行きの見えないその人の頭に回復に向けての地図を一緒に描くこと』、『怒りの矛先は、看護管理者がしっかり受けとめること』とまとめた。そのためには看護者の頭の中にもしっかりと患者の回復への筋道を描けることが必要になるだろう。患者とともに解決の方向性を共有することが可能となれば、どんなに看護は楽しく、患者は安らいだ思いで過ごせることであろう。視覚化したモデルは、ベテランから若い看護者まで幅広く活用してもらいたいと考えている。

本交流集会はグループワークを基本としたことから参加者を30～40名程度の少人数に限定した。当日はそれをはるかに上回る方々の参加があった。やむなく途中で入室をお断りした方もあった。大変申し訳なく思っている。

今日の患者の高齢化、医療安全における看護職の責任の増大、在院日数の短縮化等、看護職者は多忙きわまりない環境下で看護実践を行っている。ともすると、忙しさでつぶれそうな思いでいる看護職者に、今回の企画が楽しく、納得し、ジレンマ解決への一助になるかも？と思えた方が一人でもいらっしやれば、企画者としてはほっと胸をなで下ろすことができるのだが……。